

会員の広場



COP26と水力発電

安間 孝信（東京）

COP26が昨年十一月英国グラスゴーで開かれ世界の気温上昇を産業革命前から1・5度に抑えることで各国が合意した。CO₂が気温上昇の主たる要因であると言うのが一方にあり、多方これに異を唱えている懐疑派も居てこれらの議論は益々注目していかなければ

ならない。しかし、どちらにしても世界は化石燃料からの脱却を目指している。そしてエネルギーを電力に求めていることである。車もついに電気が世界の潮流に成った。

ところでその電力をどのように求めるか。再生可能エネルギーとして太陽光、風力が盛んに議論され、石炭火力や原子力は止められないのが実情である。各種色々と発電方法がある中で何かお忘れに成って居ませんかと言いたい。それは水力発電だ。

我が国は世界にまれな水資源大国だと電話の発明者で地質学者でもあったグラハムベルが明治の時代に喝破して居たそう。日本は多雨と山岳地帯が共存している事がポイントでこの様な国は他にないそうである。

数年前の事だが東洋経済新報社で出版された「水力発電が日本を救う」（元国交省河川局長竹村公太郎著）に出会った。読み進むうちにびっくりすることだらけ。今あるダムは充分発電して居ない。治水の為のダムも発電をし（運用変更）更にダムの嵩上げをすれば新規にダムを建設することなく年間二兆円の経済効果があるそう。資金的にも負担は少ない。

詳細はこの本をお読み頂きたい。関連する本が二冊あり何れも東洋経済からの出版である。

私は異普奇会と言う異業種交流会に参加して居る。その時その時のテーマに沿って一年一度講演会を開いている。当初昨年の六月に竹村さんに講演して頂く予定で有ったがコロ

ナ禍で延び延びに成った。改めて本年、令和四年六月四日（土）に竹村公太郎さんに「エネルギーから見た文明史。水力発電の復権」としてこの経済倶楽部ホールで講演会の開催を予定している。ご興味がある方はお問い合わせ下さい。

すぐさま原子力を止めることは出来ない。火力発電も炭酸ガスを抑制する技術は重要で研究は継続し他国に技術輸出すれば良い。

ダムに溜まった水はコストの無い石油と同じだ。年間二兆円のオイルを買わなくて済む。これこそが日本のカーボンニュートラルとして世界に出す答えだと考える。

産油国があつと驚く様子を想像し溜飲を下げるのも一興ではないか。